



YOUTH

優勝記念特集号

高円宮杯第19回全日本ユース(U-18)選手権

悲願達成！ レッズユース11年ぶりの全国優勝



高円宮杯初優勝の浦和レッズユース

周囲の期待を力に日本一を獲得 クラブの育成方針強化が結実

浦和レッズユースが高円宮杯第19回全日本ユース(U-18)選手権大会で初優勝を果たした。全国タイトルは、ユース・ジュニアユースでは05年以来3年ぶり、ユースでは97年以来11年ぶりとなる。

今回の高円宮杯は、選手たちにとって2つの意味で優勝が悲願だった。まず昨年の同大会準決勝で、1-4で敗れるという屈辱を多くの選手たちが味わっていること。そして今夏の第32回クラブユース選手権(U-18)では、まさかのグループリーグ敗退を喫していることだ。

高校3年生たちは、3年前のジュニアユース時代に全国二冠を達成していることもあって、多くの期待が寄せられた年代で、それだけにプレッシャーも大きかったはずだが、それを「見に来てくれた人に感動を」というモチベーションに変えて、見事に18歳以下日本一の座を射止めた。

またクラブとしても、6年前に下部組織の育成方針を改革、年々強化と充実を図ってきたことが1つの形となって現れ、その意味でも意義深い優勝だった。

常に先手を取る試合運び 3戦無敗の1位で決勝Tへ

1次ラウンドは9月7日から始まった。まずは、横浜F・マリノスユースを相手に阪野が前半先制。後半半ばに追いつかれたが、すぐに高橋が相手ボールを奪



1次ラウンド第3日の名古屋U18戦に快勝し、グループ1位となった(9/15 /駒場スタジアム)

って決勝ゴールを挙げ、初戦を制した。

第2日の青森山田高戦は、開始2分にPKで先制したが、追加点が取れないまま後半同点に。その後、相手の攻撃をしのぎながら40分に山田が勝ち越しゴールを挙げたが、その4分後、PKを与えて追いつかれ、2-2の引き分けに終わった。

第3日は、1勝1分け同士の名古屋グランパスU18と対戦。前半7分に山田のミドルシュートで先制してペースをつかみ、その流れのまま後半19分に原口の左クロスに飛び込んだ山田が頭で合わせて2点目。さらに26分、原口が左サイドのドリブル突破から3点目を入れた。その後1点を返されたが、3-1の快勝で、グループ1位となった。

被先制にも動じず大差で逆転 初完封勝利でベスト4入り



C大阪U-18戦、前半41分、濱田のゴールで逆転(9/21 /西が丘サッカー場)

決勝トーナメント1回戦(ラウンド16)の相手はセレッソ大阪U-18。開始から球際の激しい攻防が繰り広げられ、前半24分に本大会初めての先制を許す。しかしその3分後、左CKを山地が頭で合わせて同点。さらに41分、濱田のゴールで逆転に成功した。後半はゴールラッシュ。26分に原口がゴールを揺らすと、39分にはFKから高橋がヘッドで、終盤にも磯部が得点し、結局5-1で大勝した。

準々決勝は鹿児島県城西高との対戦。序盤から持ち前のワンタッチプレーや速い攻守の切り替えて主導権を握り、14分に高橋が先制した。さらに36分、田仲のボレーシュートで2点目。終了間際には原口がドリブルで相手DFを数人かわし駄目押しとなる3点目を決めた。

高校生ナンバーワンFWの呼び声高い大迫勇也を擁する城西高の攻撃を、レッズは菅井を中心とした守備陣が抑え、本大会唯一の無失点勝利でベスト4入りを決めた。

苦戦の準決勝、延長戦制す 1万5千人を魅了して初優勝

国立競技場での準決勝。昨年はここで姿を消した。岡山県作陽高との対戦は良いリズムで試合に入り、13分にドリブルでペナルティーエリアへ持ち込んだ山田が、DFに囲まれながら左足シュートで先制。その後もチャンスを作る。しかし2点目が入らないうちにセットプレーから失点し、前半は1-1。後半に入ると、徐々に相手のペースとなる苦しい時間帯が続くがそこを踏ん張り、延長後半5分、途中出場の石沢が相手DFを引きつけ、ヒールパス。後方から狙った原口がミドルシュートを決め、死闘を制した。

浦和レッズのホーム、埼玉スタジアムでの決勝は、名古屋グランパスU18との再戦となった。4分に山田のドリブルシュートで先制すると、16分には永田のミドルシュートがオウンゴールを誘い2-0。さらに23分、原口のゴールで3-0とリードを広げた。39分に1点を返されたが、その4分後に、田仲がFKを直接決め、相手を勢いに乗せなかった。なおも44分に阪野がネットを揺らし、前半だけで5-1の大差をつけたが、レッズは後半も攻撃の手を緩めない。51分、70分と高橋が連続ゴール。さらに、76分に山田がこの試合2点目、さらに終了間際に今大会8得点目となるゴールを決め、9-1で初優勝を果たした。ハットトリックを達成した山田は大会得点王に輝き、チームの栄冠に華を添えた。

観客15,382人のほとんどを占めたレッズファン、サポーターは、Jリーグでも見られない素晴らしい内容の試合に魅了され、選手たちとともに優勝の喜びを分かち合った。



応援してくれたファン、サポーターの前でバンザイ(10/13 /埼玉スタジアム)

高円宮杯第19回全日本ユース(U-18)選手権 浦和レッズユース 大会記録

1次ラウンド 第1日

2008.9.7(日) / さいたま市駒場スタジアム

浦和レッズユース 2 前1 後0 VS 前0 後1 1 横浜F・マリノスユース
観客 1,068人

GK	柴田大地
DF	山地 翔 菅井順平 岡本拓也 永田拓也
MF	濱田水輝 山田直輝 田仲智紀 (石沢哲也 / 87分) 高橋峻希 (磯部裕基 / 88分) 原口元気
FW	阪野豊史 (武富尚紀 / 89分)
得点	阪野(36分)、横浜FM(68分)、高橋(76分)



チーム得点第1号は阪野。横浜FMユース戦の前半36分、先制ゴールを挙げた(97 / 駒場スタジアム)

1次ラウンド 第2日

2008.9.13(土) / NACK5 スタジアム大宮

浦和レッズユース 2 前1 後1 VS 前0 後2 2 青森山田高校
観客 77人

GK	柴田大地
DF	山地 翔 菅井順平 岡本拓也 永田拓也
MF	濱田水輝 山田直輝 田仲智紀 (石沢哲也 / 87分) 原口元気
FW	武富尚紀 (磯部裕基 / 73分) 阪野豊史
得点	山田(2分)、青森山田高(63分)、 山田(85分)、青森山田高(89分)



青森山田高戦の後半40分、阪野(右手前)が左からクロスを上げ、ファーサイドの山田が飛び込む(913 / NACK5 スタジアム大宮)

1次ラウンド 第3日

2008.9.15(月・祝) / さいたま市駒場スタジアム

浦和レッズユース 3 前1 後2 VS 前0 後1 1 名古屋グランパス U18
観客 1,298人

GK	柴田大地
DF	山地 翔 菅井順平 岡本拓也 (森田健介 / 62分) 永田拓也 (池西 希 / 67分)
MF	濱田水輝 山田直輝 田仲智紀 原口元気 (岸 幸太郎 / 80分) 磯部裕基
FW	阪野豊史
得点	山田(7分)、山田(64分)、原口(71分)、 名古屋(76分)



名古屋U18戦で磯部が初先発。良い動きでチームにリズムをもたらした(915 / 駒場スタジアム)

ラウンド16

2008.9.21(日) / 西が丘サッカー場

浦和レッズユース 5 前2 後3 VS 前1 後0 1 セレッソ大阪 U-18
観客 1,082人

GK	柴田大地
DF	岡本拓也 (和田祐樹 / 89分) 菅井順平 山地 翔 永田拓也
MF	濱田水輝 山田直輝 (池西 希 / 88分) 田仲智紀 高橋峻希 原口元気
FW	阪野豊史 (磯部裕基 / 75分)
得点	C大阪(24分)、山地(27分)、 濱田(41分)、原口(71分)、 高橋(84分)、磯部(89分)



C大阪U-18戦の前半27分、同点ゴールを挙げた山地をチームメートが取り囲み祝福する(921 / 西が丘サッカー場)

準々決勝

2008.9.23(火・祝) / 西が丘サッカー場

鹿児島城西高校 0 前0 後0 VS 前2 後1 3 浦和レッズユース
観客 2,849人

GK	柴田大地
DF	岡本拓也 (和田祐樹 / 89分) 山地 翔 菅井順平 永田拓也
MF	濱田水輝 山田直輝 (石沢哲也 / 89分) 田仲智紀 高橋峻希 原口元気
FW	阪野豊史 (武富尚紀 / 72分)
得点	高橋(14分)、田仲(36分)、原口(89分)



鹿児島城西戦、相手のストライカー大迫を菅井が封じる(923 / 西が丘サッカー場)

準決勝

2008.10.11(土) / 国立競技場

浦和レッズユース 2 前1 後0 VS 前1 後0 1 岡山県作陽高校
延前0 延前0
延後1 延後0
観客 3,909人

GK	柴田大地
DF	岡本拓也 山地 翔 (石沢哲也 / 99分) 菅井順平 永田拓也
MF	濱田水輝 山田直輝 田仲智紀 高橋峻希 原口元気 (菅本啓太 / 108分)
FW	阪野豊史 (磯部裕基 / 71分)
得点	山田(13分)、作陽高(30分)、 原口(105分)



岡山作陽戦、延長後半5分に勝ち越しゴールを決めた原口にベンチの選手も大喜び(1011 / 国立競技場)

決勝

2008.10.13(月・祝) / 埼玉スタジアム2002

浦和レッズユース 9 前5 後4 VS 前1 後0 1 名古屋グランパス U18
観客 15,382人

GK	柴田大地
DF	岡本拓也 (森田健介 / 84分) 山地 翔 (池西 希 / 64分) 菅井順平 永田拓也
MF	濱田水輝 山田直輝 田仲智紀 高橋峻希 原口元気
FW	阪野豊史 (石沢哲也 / 72分)
得点	山田(4分)、OG(16分)、原口(23分)、 名古屋(39分)、田仲(43分)、阪野(44分)、 高橋(51分)、高橋(70分)、山田(76分)、 山田(89分)

決勝、前半16分、オウンゴールを誘う強烈なシュートを放った永田が「俺のゴール?」(1013 / 埼玉スタジアム)



決勝、後半25分、高橋がこの試合2点目を挙げ7-1(1013 / 埼玉スタジアム)

ひたむきにサッカーに取り組んだ このメンバーでより長くやりたい

(4) DF 菅井順平 (3年 / 7試合出場0得点)
(キャプテン)



今季、期待されながら結果が出ない時期が続いて、特に夏のクラブユースで敗退したときにすごく悔しい思いをして、選手一人ひとりが、勝つために何ができるかということを考え、もう一度初心に帰ろうということで、毎日の練習でひたむきにサッカーと向き合ったのが、優勝できた要因だと思います。

僕自身は、夏のスペイン遠征で海外の選手と当たって自分に足りないものを感じ、練習でやってきて対人にも強くなったと思います。それとチームにプラスになる声をかけられるようになりました。

6年間一緒にやってきた3年生でベンチに入れない選手もいましたが、出ている選手が「自分たちがその分もやらない」というのを感じていましたし、出していない選手もチームを支えてくれていました。本当に一つになって戦えたと思います。

優勝してから、今やっているJユースカップでも見に来てくれる人が増えたな、と感じています。高円宮杯がみんなのサッカー人生の目標ではないですし、このメンバーでできるだけ長くサッカーをやりたいので、Jユースカップも頑張りたいと思います。

決勝、終わるまで時間長かった 来年はチームを引っ張っていく

(21) DF 森田健介 (2年 / 2試合出場0得点)



1次ラウンドの名古屋戦は2-0になってからだったので入りやすかったです。決勝でも出ましたが、点差が開いていたので自分が入ってから笛が鳴るまでの時間が長いような不思議な気分でした。

ジュニアユースの時代はずっと試合に出ていましたが、ユースになるとみんながうまくって、自分は全然足りていないなと思いました。堀さんには、自分が良いプレーをするんじゃないかと、チームのためにできることを精いっぱいやればいい、と言われ

ています。

来年はチームもガラッと変わるし、自分たちが3年生になるのでチームを引っ張って、それプラス良いプレーをしたいと思っています。今やっているJユースカップでも特にプレッシャーを感じることもなくやっています。クロスボールを上げるのは得意なので、そういうところで貢献できればいいと思っています。

試合感覚が味わえた名古屋戦 ベンチ外の時もサポートしていた

(13) MF 岸 幸太郎 (3年 / 1試合出場0得点)



2年生の途中から股関節を痛めて、復帰できたのは今年の3月くらいでした。あせる気持ちもありましたが、そこであきらめては駄目だと思い、リハビリを頑張っていました。リハビリでは藤家さんにお世話になりました。

高円宮杯の予選リーグの名古屋戦が久しぶりの出場でした。緊張しましたが、みんなとできる楽しさとか試合の感覚が味わえて良かったです。

試合に直接関われないときは、みんなに良い形で試合をしてもらえるように、ドリンクなどのサポートを頑張っていました。そのときも、一緒に試合をしている気持ちでいましたし、点が入れば当然うれしい気持ちはありました。

優勝したとき泣いていた？はい(笑)うれしさもありましたが、決勝でメンバーに入れなかった悔しさも大きかったです。でも、準決勝もメンバーに入れなかったんですが、最後に原口が点を取ったときには鳥肌が立ちました。

もう身体は問題ないので、Jユースカップでは少しでも多く出られるように頑張っていきたいです。自分はこのという特長がないので、走ったり、みんなのわからないところで努力したりして、チームに貢献したいです。

決勝、ホームの雰囲気で大活躍した 優勝は通過点、また新スタート

(5) DF 濱田水輝 (3年 / 7試合出場1得点)

準決勝の作陽高戦は、相手も強くて、こちらも調子があまり良くありませんでした。でも、そこでチームが一つになれて、勝てたというのが決勝の内容につながったと思います。

1年生のころから、自分たちの代では絶対優勝したいと思っていたので、優勝できて本当に良かったです。決勝では、サポーターもすごく多くスタンドにいましたし、ホームという雰囲気だったので、恥ずかしいプレーはできないということを考えていました。そこで頑張ったことが、ああいう結果につながったんだと思います。

今季は、コーチングスタッフの方たちも増えて、

そういう環境も整えてもらえたので、すごく効率的な練習ができていると思います。誠剛さんのフィジカルトレーニングなどをやって、身体のキレも感じるようになってきました。



この優勝という経験は、通過点だと思っています。この経験を糧に、また新しいスタートを切りたいと思います。

すごくタレントを持った選手たちが集まっていると思いますけど、信頼感もありますし、仲も良いチームです。プレー以外でも結構馬鹿なことをやっていますし、良い仲間が集まったと思います。

先輩と一緒に良い経験ができた 来年、再来年は自分が中心に

(24) FW 磯部裕基 (1年 / 5試合出場1得点)



3年生と一緒にいろいろなところに行って試合をすることができました。先輩の良いところを見て、自分にも良い経験になったと思います。

試合では、先輩にはこぼれ球を拾えということと言われていて、今大会はそれがうまくいきました。先輩たちは動いたところにパスを出してくれますし、結構うまくできたんじゃないかと思います。緊張とかはあまり感じませんでしたし、堀さんに言われたとおりにはやればいい、と言われていて、点を取れとも言われていました。だから、セレッソ戦では点を取れて良かったです。

自分が先発した1次ラウンドの名古屋戦は、自分でもすごく良いプレーができたと思っていて、印象に残っています。このチームはすごく元気で、その元気がプレーにも出ていて、すごく明るくて、そのチームワークが試合に出ているんだと感じました。

家に帰ってメダルを見たときに、優勝したんだな、と実感しました。来年、再来年、自分が中心選手になれるように、この経験を生かしていきたいです。

個人的には、Jユースカップを今やっているの、その中で活躍して来年につなげられるようにしていきたいです。

大会をふり返って --- 選手たちの感想

後ろから見てすごく楽しいチーム 充実したスタッフで練習できた

(1) GK 柴田大地 (3年生 / 7試合出場)



このチームは後ろから見てると、本当に楽しいですよ(笑)。前が面白いサッカーをしているので、その部分に目が行きがちだと思いますけど、やっぱり攻めているときのカウンターがすごく怖くなるので、後ろでしっかり準備していました。

今季から、動きのことでわからないことがあれば、すぐに誠剛さんに聞いて身体の使い方も変化したと思いますし、健さんや天野さんは、練習が終わったあと僕らのことをしっかりと見てくれているので、全体練習が終わったあとも、しっかりとスタッフがついてくれて良い練習ができています。

決勝の前はみんな興奮していた プロとしてレッズに戻りたい

(10) MF 田仲智紀 (3年生 / 7試合出場2得点)



1次ラウンドの青森山田高戦の後、どこが悪かったのか、こうしたら良かったというのをみんなで話し合えて良かったです。かなり引いてきて、こちらにポジションをさせておいて、ミスについて速いカウンターという、これまで経験したことのない相手だったので勉強になりました。

C大阪戦は先にやられてしまい、少しあせりましたが、山地が同点ゴールを決めてくれたので、また落ち着いてやれました。山地はクラブユースのときは出られなくて、高円宮杯からスタメンに定着したところなので、彼のゴールはうれしかったです。

それまで自分でゴールを決めていなくて、記録を見たらあまりシュートを打っていないだったので、城西高戦は3本以上打とうと決めていました。だから前に行ってゴールも決められたと思います。

準決勝から決勝まで中1日でしたが、疲れはあまり感じず、早く埼玉で試合をやりたい気持ちでした。みんなもアップに行く時間が早かったりして、興奮していました。僕がボールを取られたことから失点したので、その後にFKを直接決められて良かったです。6年間一緒にやってきた何人かの選手と、最後の大舞台で一緒にプレーできなかったですが、

その分まで良い結果を残すことができました。

トップには上がれませんでした。大学1年から試合に絡んだり、ユニバーシアードを目指したりして、プロとしてレッズに戻ってきたいと思っています。

自身、初の全国優勝うれしい 来年、再来年も目指していく

(25) DF 岡本拓也 (1年生 / 7試合出場0得点)



夏のクラブユースの途中で、センターバックから右サイドバックになりました。上がるタイミングなどは難しいですが、成功したときの楽しさなどをやっていくうちに知るようになりました。

高円宮杯では、先輩に迷惑をかけないように、自分のできることを100パーセントやろうと思えました。全国大会の優勝は自分自身初めてなのですごくうれしかったです。先輩たちが優勝という大きなことをしてくれたので、それを汚さないように来年、再来年も優勝を目指してやっていきたいです。

一緒に戦っている気持ちよかった 3年前の優勝より感動したかも

(11) FW 武富尚紀 (3年生 / 3試合出場0得点)



ユースが上がってからは、トヨ(阪野)が入ってきたり、下の年代の原口が出てきたりして、出られないときもありましたが、途中出場頑張ってきました。僕が入ったときは周りの人よりは元気なので、自分が相手を追い込んでいくようにしていました。

久しぶりに先発した青森山田高戦では、力が入りすぎたのか、あまり出来はよくありませんでした。準決勝の作陽高戦が大学の受験と重なり悩みましたが、周りから「必ず決勝に行くから」と言われて受験に行きました。夕方、永田から「埼玉だぞ」と電話で聞いたときは、すごくうれしかったです。

決勝でメンバーから外れたときは、少し気落ちしましたが、自分のチームが良い試合をしているのを見て、すごくうれしく思いました。しっかり声も出せましたし、チームとしてまとまれたと思います。出ているみんなも、僕らと一緒に戦っている気持ち

を、結果で示してくれたので、本当に楽しかったです。U-15の優勝より感動したかもしれないです。

思い出は決勝点に関われた準決勝 ベンチにいても勉強になった

(19) MF 石沢哲也 (2年生 / 5試合出場0得点)



一番の思い出は、準決勝の作陽高戦で、あれだけ緊迫した中で、自分が出られて決勝点に関われたことです。入る前はあの中でうまくできるか不安だったんですが、入ってからは自分がやらなきゃという気持ちでいっぱい、緊張はしなかったです。

チーム一丸となって戦えたと、試合が不安定なときはベンチのメンバーがよく支えて、一つになったことで優勝できたと思います。レッズユースの中盤にはすごい選手ばかりで、その代わりに自分が出ることになるので、責任を感じます。

レベルの高い試合ばかりだったので、ベンチにいるときも勉強になりましたし、出ているときは直輝たちトップに上がる選手を身近に感じることができて良かったです。

一緒にやってきたチームの優勝 来年は自分自身がピッチで

(18) FW 葺本啓太 (2年生 / 1試合出場0得点)



準決勝の最後に出ただけですが、それまで試合に出られなかった分、しっかり準備していました。同点になってから緊迫して良い緊張感の中で自分の出番を待っていました。僕が出るときは1点リードしていた時間帯で、何とかしてチームが勝てるように思っていました。初めてのピッチで勝利の瞬間を迎えられて良かったです。

出場はそれだけでしたが、一緒に練習してきたチームが優勝したことはすごくうれしかったです。来年は、今年このチームと一緒にやってきた自信もありますし、後輩たちに今の自分のような気持ちを味わってもらいたいです。もちろん自分自身がピッチの上で優勝したいです。

得点王の機会くれた周りに感謝 Jユースでも目標を見つけて戦う

(8) MF 山田直輝 (3年生 / 7試合出場8得点)



去年、準決勝で負けたときから、埼玉スタジアムでやりたいうのをみんな目標にしてこの1年をやってきたので、うれしいです。得点王になったのは、僕がたまたま決めただけで、そこまでは他の人たちが作ってくれたものなので、感謝したいです。このチームは、みんなが、自分が自分がではなくて、周りへの心遣いができるチームだと思います。まだJユースカップがあるので、そういう中で一つひとつ目標を見つけてやっていきたいです。

ベンチでもモチベーション下げず 全員で獲った優勝を実感できた

(12) DF 和田祐樹 (3年生 / 2試合出場0得点)



クラブユースの全国大会ぐらいから先発で出られなくなりました。練習はいつもどおり、全力で自分のプレーを出していましたが、出られないことは受け止めなくてはいけない部分だと思っていて、ベンチを盛り上げることや、チームのために何ができるのかを考えながらやっていました。

クラブユースは1度も出られないまま終わってしまいましたが、僕は決勝を見に行きました。FC東京が優勝しているところを見て、自分たちも優勝したい、という気持ちが強くなりました。

大会では、チームが一つになっているような感じでした。決勝で僕はメンバーに入りましたが、入れなかった3人の3年生はやっぱり少し落ち込んでいました。ベンチメンバーで3年生は僕1人だったので、彼らのためにも絶対に勝たなくてはいけないと思いました。自分としてはいつでも出られる準備をしていたつもりです。僕のような立場の選手は、まずモチベーションを下げないこと。下げたら、いざ出たときに良いプレーはできないと思いますし、出ている選手にも影響します。常にモチベーションは高く持っていました。だから全員で獲った優勝だと感じ、本当にうれしかったです。

Jユースカップは自分にとって最後の大会だし、少しでも多く出られるように練習を頑張っています。高円宮杯で優勝したことで、それ以上のモチベーションで臨まないと、厳しい戦いになると思います。

仲間の声で、また心一つになれた レッズユースに来て良かった

(3) DF 山地 翔 (3年生 / 7試合出場1得点)



準決勝の作陽高は、すごく粘り強かったし、ただ蹴ってくるだけではなくて、しっかりついてきて、あいたところにロングボールを入れてきたり、リズムを変えたり、いろいろやってきたので大変な試合でした。延長前半の終わりに交代してしまって、最後の場面にピッチにいなかったのは個人的にすごく悔しかったですが、チームとしては僕と代わった石沢がアシストして点が入って勝って良かったです。

決勝では、ミスが多く自分が納得できるプレーができなくて、残念でした。途中で交代したときは悔しくてロッカーに戻ってボーっとしてしまっただけですが、ベンチに入れなかった幸太郎とか涼司とか武富が「ナイスプレー！」と涙ながらに言ってくれて、試合に出られない人がこんなに心一つにして支えてくれたので、今は自分のことどうこうでなくチームを見守ろうという気持ちになって、優勝をうれしく感じる事ができました。

レッズユースに入るときは、全国一のチームだし、みんな技術も高いし、自分が出られるかどうかかわからなかったですが、ここで出られたらある程度高いレベルになれるな、という気持ちでした。来て良かったと思っています。

声を出さなくてもお互いがわかる 今後はトップのレギュラーが目標

(14) FW 原口元気 (2年生 / 7試合出場5得点)



仲間とここまでやってきて、ピッチも埼玉スタジアムで優勝できて、何も言うことはないです。ジュニアユース時代から一緒にやっている選手が多いですし、もう声を出さなくてもやろうとしていることはわかります。出したらみんな動くし、そうすると自然とスペースがあいてくる。そういうことが徹底されているから連携が良いのだと思います。今後は、トップでJリーグや公式戦に出場することが目標ですし、レッズのレギュラーを目指したいです。

準決勝の苦戦が決勝の大量点に Jリーグ出場目指して頑張る

(7) MF 高橋峻希 (3年生 / 5試合出場5得点)



自分たちの方が名古屋よりも苦しい準決勝を戦ってきたという決勝の大量点につながっていると思います。攻守の切り替えが速くて、今までで一番良い試合だったと思いますが、それだけみんな勝ちたい気持ちが強かったんだと思います。後半に入ってもペースを落とさず、それは気持ちが出せたからかなと思っています。チームワークはすごいと思います。出ていない選手からも声を掛けてもらって、ピッチの11人が結果を出せたというのがとても良い試合でした。今後は、トップでJリーグにまだ出場していないので、それを目指して頑張っていきたいです。

仲間を生かすのも自分の仕事 右ヒザの痛み押し出して出場続けた

(9) FW 阪野豊史 (3年生 / 7試合出場2得点)



自分は2得点でしたが、ゴールすることだけではなく、自分が前でキープしたり、落としたりして峻希や原口のプレーを生かせるようにするのも自分の仕事だと思っていました。それはできたと思います。

右ヒザがずっと痛かったんですが、試合になると気にならなくなりました。でも集中が切れると痛み出して、準決勝の後はずっと痛かったです。決勝は無理かな、と思ったんですが、藤家さんや誠剛さんにいるやってもらって、出られました。恩返ししたかったので、自分がゴールを決められて良かったです。病院に行って、悪い結果を聞いたらショックで出られなくなるかもしれないと思い我慢して、決勝が終わってから診てもらって、結局半月板を手術しました。大会中に行かなくて良かったです(笑)。

中学校時代は全国大会にも出たことがなかったので、レッズユースに来てそういう思いを味わってみたいと思っていました。中学時代は自分の思いどおりにできたのがユースでは周りがみんなうまくて、ついていくのに必死でした。高いレベルで試合ができて自分がレベルアップできたと思います。

クラブユース敗退で甘さを認識 一つの目標に向かってまとまった

(6) DF 永田拓也 (3年生 / 7試合出場0得点)

高円宮杯の優勝は、高校生活で一番目標にしていた。クラブユースで負けたこともありますけど、最後の高円宮杯というのを目標にやっていた。去年、準決勝の国立で負けていたというのもあったと思います。

クラブユース選手権では、甘くは見ていたつもりはなかったんですが、予選は突破できるだろうという気持ちがありました。自分たちは、まだまだなんだというのを認識させられました。



決勝は、サポーターのみなさんがたくさん来てくれて、そういう環境で試合をするのが初めてだったので、最初は戸惑いでしたが、そういうところを経験して、自分のサッカー人生は、人に支えられてやっていると実感できました。

優勝する前と後では、みんなが一つになったというのは感じます。タレントが多いということもあると思うんですけど、みんな個人が良いプレーをしようとか、我が強くなってしまおうところがあるんです。でも、高円宮杯優勝というところで一つになって戦う経験をしたことで、みんな大人になった部分はあると思います。

本当に、サッカーでも私生活でも個性が強い仲間がそろっています。そういう個性がまとまることができたのは、一つの目標に向かって進むということができたからだと思います。試合なら、ゴールに向かって、守備のときなら相手からボールを奪う、そういう目標があるので、意識がまとまっていけるんだと思います。

個人的な目標は、今後、直輝や峻希はトップでデビューをしているので、早くトップの人たちと練習をしたいです。上でレギュラーを獲るといのは大きいことだと思うんですけど、それを目標にやらないとプロに上がる意味はないと思うので、頑張っていきたいです。

緊迫した試合に出て、経験積んだ 来年も良いサッカー見てもらう

(15) MF 池西 希 (2年生 / 3試合出場0得点)

このチームは個々の能力が高いので、バラバラではなく一つになれば本当に強いです。良かったのは、試合に出ている選手が、出ていない選手のためにも勝とうという気持ちでやっていたことだと思います。僕がまとめ役？いや、たまたま声大きいのかしゃべるのが好きだけです(笑)。涼司くんとかが復帰してからは、もっとまとまったと思います。

僕自身は3試合に出たんですが、決勝以外は緊迫した中で出たので良い経験になりました。来年に向けて、高円宮杯とはこういうものなのだとわかって、良かったです。



来年は、今年に比べたらタレントもいないですが、まとまれば強いと思います。これから多くの人が見に来てくれると思いますが、その人たちに良いサッカーを見てもらうためにも頑張ります。

電話で決勝の場に戻ってきた みんなで支え合っている

(2) DF 池田涼司 (3年生 / 出場なし)



今年はなかなか試合に出られなくて、久しぶりに先発で出た7月のプリンスリーグで頭をケガしてしまいました。それから1週間寝たきりで、クラブユースは病院で応援するしかなかったです。普通の練習ができるようになったのは10月でした。

高円宮杯の目標は、チームとしては優勝でしたけど、自分個人としては1秒でも長く試合に出たいということでした。準決勝の前、10月8日にヘディングOKの許可が出たので、ベンチに入れるかな、という気持ちもありました。

よくムードメーカーとか言われますけど、それを心がけているわけじゃないです。手抜きが嫌いなだけで、やっていない奴がいたら怒り、一生懸命やっている奴はほめる。本能的にやっているだけです。

準決勝の作陽戦はスタンドで見ましたが、延長に入るときは、チームに何かできないか、と思い下に降りていきました。ベンチに入っている選手がストレッチとか手伝っていたので、僕らはドリンクをやったりしました。僕が試合に出ているとしたら、ベンチに入っていない者がスタンドでなく下で見ていてくれた方がうれしいだろうと思いますしね。

自分の中のどこかで、最後にはメンバーに入れるかな、という気持ちがあったんでしょうね。決勝当日、メンバーから外れた瞬間には、涙が止まりませんでした。そのときの自分がチームに対して何ができるかと言えば、泣いているだけで何もできない。だから、その場にはいない方がいいかな、と思いました。試合の前に全員で円陣を組んで、そのときの声はいつも僕がかけているんですが、今の自分にはきっとその声は出せないな、と思いましたから。

メンバーから外れた選手が、チームの用事をやるのが普通なんですけど、「ごめん、上で見るわ」と言っていて、スタンドに行きました。でも試合も見ることができず、スタジアムの外にいたんです。

ちょうどそのころ両親が埼玉に来て、父親に「あいつらは頑張ってるんだから、見に行けよ」と言われて一緒に入りました。スタンドの端っこで1人で見てたんですけどね。前半が終わって、もう何もやることないな、と思い帰りかけたから、ベンチに入っていたいなかつた武富から「みんな待ってるから、戻って来いよ」と電話がかかってきました。峻希が「涼司を連れてきて」と言っていたらしいです。「みんなも戻って来てほしいって言うてるから」と言われて、戻らなくちゃいけないな、と思って下に行きました。

後半20分ころからコーナーの近くにいたんですが、希が交代でピッチに入って、みんなに「涼司、戻ってきたよ」と言っていたらしいですね。それから峻希も直輝もゴールを決めるたびにこっちに来てくれました。みんな心配してくれたんだと思います。

決勝が終わって泣いていたのは、ピッチに立ってあいつらと優勝を分かち合いたかったな、という悔し涙の方が強かったんだと思います。

* * *

自分は優勝に貢献したつもりはないです。決勝でも抜け出して迷惑をかけましたし。でも、帰ろうと思ったときに電話が来るチームなんですよ。自分は1人じゃなくてみんなから支えられているし、自分がみんなを支えているとは思ってないんですけど、もしかしたらそうなのかもしれない。みんなで支え合ってサッカーしてるんだな、と思います。

Jユースカップの柏戦(10月19日)で少し試合に出ましたが、無我夢中でした。ちょうどあのピッチ(埼玉第4G)でケガしたんですよ。だから、あのピッチに戻ってきた、という感じですね。



決勝、後半44分、ハットトリックを達成した山田と石沢、高橋が池田のところへ駆け寄る(10/13 / 埼玉スタジアム)

期待されたとおりの成長を見た

サポーター・横田美音子

高円宮杯優勝おめでとうございます。

ベンチにも入れなかった選手の方たちや、多くの方々に支えられた優勝だと思います。

私自身は、今の高校3年生の選手たちは、中学2年のころからよく見るようになり、中3のときのクラブユースの優勝や高円宮杯の優勝も見ていました。その後、期待されたとおり順調に成長してきたと思いますが、何よりも周りの指導者の方々の指導が良かったのではないかと思います。伸びるべき素材をしっかり伸ばしていただきました。

今やっているJユースカップは、毎年良いところまで行ってもまだ頂点はないので、頑張してほしいですし、高校3年生の選手にはやれるところまでやって、レッズユースの残りの時間で悔いのないサッカー生活を送っていただきたいと思っています。

よく頑張った、おめでとう! --- クラブスタッフから

レッズの将来を象徴するサッカー

藤口光紀(クラブ代表)

高円宮杯でレッズユースが優勝したことは大変意義のあることです。今の3年生の多くは、自前で育てた選手がトップに入って活躍するという方針を02年に打ち出したときの第一期生であり、今季は4人がトップに昇格します。今回だけで終わるのではなく、毎年選手が昇格していき、彼らがトップチームの核になっていけば、レッズのスタイルというものができていきます。試合をご覧になってわかるとおり、人もボールも動く、バラエティに富んだサッカーをしていますし、ゴール前のシュートの意識も高いです。何よりチャレンジしています。チャレンジするからミスもありますが、それを取り返す努力もしています。それによって勢いが出ます。まさにレッズの将来を象徴するようなサッカーをやっていると思います。今季のチームにたまたまそういう選手が多いというだけでなく、レッズはジュニアユース時代から、そういうサッカーを一貫してやっています。今後ますます充実した体制にしていかなければならないと考えています。

やればやっただけ素直に反応がある

池田誠剛(フィジカルコーチ)

私は4月にレッズに来たのですが、すぐに、良い選手がそろっているチームだな、と思いました。個々に特長があり、一人ひとりが頑張れるし、身体能力もかなりあって、みんなサッカーが好きです。しかし時間がたつにつれ、足りないところも見えてきました。一つはメンタル面で、相手が自分たちより強い、同等の力を持つチームだと、全力で向かうんですが、相手の力が下だったり試合で優位な展開になったりすると“ナメる”というところがあります。それが一つの落とし穴かな、と思いました。

フィジカルコーチという仕事でいうと、個々の選手を見て、100持っている力の60~70しか出せていない選手がいれば、もっと力を出せるようにしました。やはり彼らの持っているDNAはすぐくて、やればやっただけの成果が出るんです。

トレーニング自体は楽しいものでもないので、まず私との信頼関係を築かないと、消極的になってしまいます。まず、それを作るまでが大変なんです。素直な選手ばかりだったので、それは早かったです。

準決勝から決勝まで中1日しかありませんでしたが、それこそ私たちの力の見せどころでした。それまでもうまく調整できていたので、良い準備ができて不安なく決勝に臨むことができたと思います。

優勝への気持ち強かった選手たち

岩瀬 健(ユースコーチ)

僕は今季からコーチになり、まずは堀さんのサッカーを理解して、それを選手たちにうまく伝えたり、うまく進んでいくようにサポートしたりすることが主な仕事だったと思います。選手個々へのアドバイスとしては、本人がすでにわかっていることを再確認させたり、整理してあげたりすることが主です。選手本人が、自分が向上したい、変わりたいという気持ちを持っていることが重要で、そのきっかけを与えることが僕らの仕事でした。

高円宮杯はすごく大きな大会ですが、選手たちがそれを十分認識していて、この大会で優勝したいという気持ちが強かったので、特別に彼らのモチベーションを上げるためにどうこう言うことはありませんでした。大会での優勝だけが目的ではありません

が、結果が出たことで、堀さんがあせらずにじっくり伝えていけるということは、あると思います。



大事なのは一日一日の積み重ね

天野賢一(ユースコーチ)

僕はメンバーに入れなかったBチームの選手たちを担当していましたが、メンバーに入れなかった子たちというのは、やっぱり気持ちが落ちがちになってしまうんですね。試合に出られる、出られないで一喜一憂してしまう。それは仕方ない部分もあるんですけど、ただ、今が大事なのではなく、過程ですから、今、一生懸命に積み重ねることで、将来につながるわけだから、一日一日、大事に生活を送ろうということは、日々伝えていました。

埼玉スタジアム1万5千人の中でプレーして、勝つとこれだけの喜びが得られるとわかったわけですし、メンバー外の選手たちに関しても、あそこに立てれば、これだけの思いができるというのがわかったと思います。それに向かってまたやり続けるということを学んで欲しいと思います。

試合で気持ちが高まる選手たち

藤家 薫(アスレティックトレーナー)

私は選手のコンディションなども見ていたんですが、試合が進むごとに選手たちの気持ちが高まっているのを感じていました。たとえば飯野はケガを抱えながら試合に出場していたんですが、試合の当日になると痛みがない、試合中になるともっと痛みを感じないくらいになるといって、前日までの痛さとかを考えると、僕自身非常にびっくりしました。他の選手たちも、試合になると前日よりコンディションが良い状態になっていました。

僕自身は、ふだんから、どうだ、とか声を掛けるのではなく、何かあれば選手から言うように指導しています。今日の練習ができる、できない、というのは自分でコーチや監督に伝えるのも選手として大事なことで、それを優先しようと思っています。

準決勝の帰りのバスの中で、来年のメンバーの子たちと、また国立に来たいね、と話しました。決勝が終わって埼玉スタジアムで解散するときも、また決勝に行きたいね、と話しました。そのモチベーションをいかに年間通して保てるか、ということだと思うので、ちょっとケガをして道を外れたときに、僕自身も良い刺激を与えてあげられればと思います。

人は変わるという自信を持って

井嶋正樹(GKコーチ)

夏のクラブユース選手権で負けた、その悔しい経験が生かされた結果、高円宮杯で優勝に到達できたというのは、子どもたちが大人に近づくことができたんじゃないかと思っています。内面が変化した分、サッカーも変化したんだと感じます。

GKは、柴田が基本的に出場していましたが、高円宮杯では、試合を重ねるごとに、自信を持ってました。これまで、ミスをして自信をなくし、それを引きずってゲームを続けることがありましたが、高円宮杯では、それを克服して成長できたのではないかと思います。良い選手というのは、いかにミスしたあとのワンプレーを切り替えてできるか、そのワンプレーで信頼を取り戻せるか、というのが大事なんです。以前の柴田は、そこで考えて消極的な結果になってしまうということがありました。そういう部分が割り切れるようになって、自信を持ってたので安定につながったと思います。

それぞれ進路はいろいろですけど、この一夏で変化できたという経験、人は取り組み方や考え方で変化できるんだということ、どの世界、どのレベルに行っても生かして欲しいと思います。

やってきたことの成果が出た

中村修三(強化本部長)

今の選手たちではないのですが、あるときユースの選手に個々の目標を聞いたことがあります。すると、ユースでレギュラーになること、全国大会で優勝すること、などが答えて、誰もレッズのトップ選手になること、と言わないんです。大変ショックでした。みんな入ってくるときは、Jリーガーになるという目標を持っているんですが、レッズでやっているうちに、それがなくなっていたんですね。それで02年から、クラブの強化担当が下部組織も見ることにして、トップの中心を担うプロ選手を作る、という明確な目標を持って、施設やスタッフを年々拡充してきました。今後、ユースだけでも大原で練習ができるような施設の改善も考えています。

今季は高円宮杯で優勝しただけでなく、過去最多の4人がトップに上がるわけで、それがやってきたことの成果だと思います。これだけのチームができてしまうのが大変ですが、このチームを目標として、毎年継続していくことが大事です。



高円宮杯U-15大会で優勝したときのレッズジュニアユース (05/12/29)

この6年間を思うと感慨深い

村松 浩

(レディース監督=前アカデミーセンター長)

決勝を見ていて、すごく感慨深かったです。小学生時代にスカウティングをして、第一期生として迎えたのが、今の高校三年生で、その彼らが登り詰めて一つの結果を出してくれました。こういう選手が6年間、こういう環境でやると伸びてくるものなんだ、と育成という観点から、僕もすごく勉強させてもらえました。去年も決勝に行くだろうと思っていたんですが、残念ながら準決勝で終わってしまい、今年それを乗り越えて、タイトルを獲得したのは、メンタルでもたくましい連中だし、技術的にも優れた選手が多くそろっているチームだったと思います。ここまで成長してくれてありがたいという思いでいっぱいです。

今後もレッズに誇り持つ選手を

名取 篤 (ジュニアユース監督)

彼らが3年前にジュニアユースで優勝したときにも、最後の最後に、どこにこんな力が残っているんだらう、とびっくりしたんですが、今回もまたやってくれましたね。でも、まさか9点取るとは(笑)。今年のジュニアユースが夏のクラブユースの準決勝で名古屋に負けていたので、そのお返しをしてくれたのかな(笑)。

彼らの中には全日本少年大会で優勝した選手もいますが、僕はかつてその子たちに、小学生で優勝したからといって中学生でも優勝できるわけではないよ、と言いました。それと同じことが今回も言えるはずで、他のクラブのチームも追いかけて来るわけですから、その中で優勝するというのは並大抵のことではなかったらと思うます。

環境的にもクラブが育成にどんどん力を入れ始めて、もう6年たったのか、という思いですが、これからもレッズというクラブに誇りを持った選手を育てていきたいと思ひます。

ジュニアユースの選手にとっても、いつも一緒に練習しているユースの優勝というのは、すごく刺激になるはずで、U-15の高円宮杯はこれから関東予選ですが、ユースに続くように頑張ります。

プロ選手にも大事な優勝の経験

広瀬 治

(トップコーチ=前ユース監督・元ジュニアユースコーチ)

01年からジュニアユースのコーチを務めていましたが、02年にプロ選手を自前で育てるという方針が強くなって、今の高校3年生は、小学校6年のときにスカウティングしていた子たちです。彼らがユースに上がってきたときに私はユースの監督をしていましたが、前年に二冠を獲ったということもあって自信を持ってプレーしていました。みんな意欲的でひたむきでした。

今、トップの練習に参加している選手もいるし、サテライトリーグに出場した選手もいますから、トップの選手たちも、ユースのことは気にかけています。レッズのトップで活躍できる選手というのは、優勝という経験もしてあかないといけないと思うので、今回の優勝はそういう意味でも良かったです。

これからの選手たちも、どんなときでも戦うということを忘れず、レッズのトップを目指して頑張ってくださいと思います。

プロで活躍するのに必要なレベル

矢作典史 (アカデミーセンター長)

今回の優勝は、今後の下部組織にとって、チーム作りの基準になると思います。6年前に方向性を変えた結果が出て、やはり取り組み方によって成果が出てくるという証明になりましたから、今後必要な手を打っていくのに良い契機になったと思います。

今回、チームの中心になったのは、すでにトップで練習している選手たちでしたが、本当はユースの中だけであれくらいに引き上げておきたい、と思っています。トップでやっていた選手がユースに降りてくるのではなく、ユースの段階でもう少し上のレベルまで上げてからトップに送っていきたく、ということです。浦和レッズのトップですから、毎年これくらいのレベルでサッカーをしていないと、中

心になっていく選手は生まれませんじゃないかと考えています。そういう意味ではジュニアユースのうちから、また小学生のスカウティングの段階からしっかりやっていくことが大事だと考えています。

素晴らしかった3年生たち

児玉賢太郎 (アカデミーセンター総務)

この時期は毎年そうですが、今回も準決勝、決勝の日と学校の修学旅行が重なった選手がいました。親御さんと、学校とも話をして、その選手たちは修学旅行に行かないという結論になりました。その中で、一番印象に残ったのは、選手の親御さんが「修学旅行というのは誰にでも機会は来るが、高円宮杯の決勝というのはサッカーをやっている高校生の憧れだし、誰でもその場に行けるわけじゃない。それに懸けてみたらどうだ」と言ったことです。僕自身その言葉に感動しましたし、よりいっそう彼らをサポートしていかなければならないと思ひました。

僕は、選手たちの、年の離れた兄貴のようなつもりでいるので、何でも話してほしいし、彼らもそういうつもりでいてくれると思っています。指導者とは違う立場で励ましたり、叱ったり、ほめたりすることで、彼らのモチベーションやコンディションが上がるように考えていますが、今回、優勝という結果が出たことで、少しは役に立っていたのかな、と思っています。

またチーム全員で戦っているのだから、ベンチに入れない選手のモチベーションが落ちないように気を配りながら、その選手たちがチームのためにやれることをやらしてもらおうようにしています。今回も3年生でベンチに入れない選手がいましたが、彼らの

声というのは2年生、1年生に大きく伝わるし、見本にもなります。その点でいうと、今季の3年生は素晴らしかったし、記憶にも記録に残る年代でした。

この大会がゴールではないので、これからも常に目標を持って何事にもトライして欲しいし、人間としても成長して欲しいです。浦和レッズの『誇り』を胸に。

Jユースでも高いレベルの経験を

堀 孝史 (監督)

決勝が終わって数日は周りからいろいろ声をかけられましたが、もう落ち着いています。優勝という結果を出せたということは心に留めてよいことだと思いますが、選手にとってはこの後が大事で、その点はこれまでと変わらずにやっています。チームのやり方を変えるわけではないですが、高円宮杯にあまり出場しなかった選手の可能性を見ていくことはやっていきたいと思ひます。いま戦っているJユースカップでも、決勝トーナメントに進んで、高いレベルの試合を経験させたいと思ひています。



パッシングポイント ----- 取材者から

高野和也 (Little Diamonds 編集)

この特別号のために、何人かの選手に高円宮杯優勝の感想を聞いた。そのとき、選手たちはこの結果はあくまでも「通過点」と話し、それぞれの次の目標を見据えていた。

実際、もうすでにJユースカップという大会も始まっているし、選手にとって、高円宮杯での優勝がサッカー人生のゴールではないだろう。この年代ではっきりとそう口にできる彼らにあらためて頼もしさを感じたし、その意識の高さがこれまでの結果につながったのだろうと感じた。

ただ、一つ思うのは、あの通過点は、誰もが通ることのできるものではないということ。選手たちは、昨年の準決勝での敗戦、今夏のクラブユース選手権での予選敗退、それらの悔しさをバネに、少し大人へと成長し、苦しいときにも焦れることなく、助け合って決勝へとたどり着いた。そして、あの大観衆のスタジアムの中で、自分たちが最高のパフォーマンスを発揮し、最高の結果を手に入れられた。そんな素晴らしい経験を、どれだけのサッカー選手が持つことができるだろう。選手は、口々に「見てくれている人たちに何かを伝えるサッカーをしたい」と話していた。あの日見せたレッズユースのサッカーに、観客は「何か」を感じ取ったと思う。そんな、1万5千人に何かを伝える経験など、今の社会でどれだけの人々が持てるだろうか。

目標を持って生きる者にとって、現在はあくまでも自分が望む未来へたどり着くための通過点だ。だが、その通過点である現在から得たものを推進力に変えて進むことができれば、おそらく自身が望

むゴールにはたどり着けない。

今季のトップに上がる選手は4人と決まった。それは、そのほかの選手が、現段階で浦和レッズでは、プロになれないということだ。だが、これから先、プロになる可能性がゼロだということではない。その道が困難であることは想像に難くないが、それぞれのゴールを見失わずに歩み続けることができれば、いずれまた道は交わり、たとえライバルとしてであっても、来春別れた仲間とピッチで再会することが可能だろう。

できうなら、数年後、彼らの多くが再び赤いユニフォームを身にまとい、あの日のサッカーを超えるものを今度はJの舞台で披露してもらいたい。その場面を想像するだけで自然と笑みがこぼれてしまうのは、僕だけではなく、大勢のことを彼らには覚えていて欲しい。

